

From the Pulpit of the Japanese Baptist Church of North Texas
February 26, 2017

第二のしるし

ヨハネ 4:46-54

4:46 イエスは、またガリラヤのカナに行かれた。そこは、かつて水をぶどう酒にかえられた所である。ところが、病気をしているむすこを持つある役人がカペナウムにいた。

4:47 この人が、ユダヤからガリラヤにイエスのきておられることを聞き、みもとにきて、カペナウムに下って、彼の子をなおしていただきたいと、願った。その子が死にかかっていたからである。

4:48 そこで、イエスは彼に言われた、「あなたがたは、しるしと奇跡とを見ない限り、決して信じないだろう」。

4:49 この役人はイエスに言った、「主よ、どうぞ、子供が死なないうちにきて下さい」。

4:50 イエスは彼に言われた、「お帰りなさい。あなたのむすこは助かるのだ」。彼は自分に言われたイエスの言葉を信じて帰って行った。

4:51 その下って行く途中、僕たちが彼に出会い、その子が助かったことを告げた。

4:52 そこで、彼は僕たちに、そのなおりははじめた時刻を尋ねてみたら、「きのうの午後一時に熱が引きました」と答えた。

4:53 それは、イエスが「あなたのむすこは助かるのだ」と言われたのと同じ時刻であったことを、この父は知って、彼自身もその家族一同も信じた。

4:54 これは、イエスがユダヤからガリラヤにきてなされた第二のしるしである。

一、役人の求め

ガリラヤ地方のカペナウムにひとりの「役人」がいました。おそらく、領主ヘロデに仕える人だったのでしょう。彼の家には何人ものしもべたちがいましたから、裕福な生活をしていたように思われます。

人は、さまざまなものに恵まれ、平穏な日々を過ごしている間は、神を信じ、神に信頼し、神を求めることをしないことが多いものです。しかし、何かの苦しみにあう時には、そこからの救いを求めて目を神に向けるようになります。人は、多くの場合、苦しみを通して神に近づき、神に近づくことによって、受けた苦しみにまさる大きな恵みを受けるのです。それで、聖書は「苦しみにあったことは、わたしに良い事です。これによってわたしはあなたのおきてを学ぶことができました」（詩篇 119:71）と言っています。

しかし、苦しみのまっただ中にいるときは、それが「わたしに良い事です」などとは、簡単には言えないものです。とくに、この役人のように、自分の息子が急な病いで死にかけているという状況ではそうです。親の死はとても悲しいものですが、子どもが親より先に死ぬ、親が子どもの死を見るということほど、痛ましいことはありません。イスラエルの父祖ヤコブは、かわいがっていたヨセフが死んだと聞かされたとき、長い間そのことを嘆きました。ヤコブの息子や娘たちがこぞってヤコブを慰めようとしたのですが、ヤコブはそれを拒んで、「わたしは嘆きながら陰府に下って、わが子のもとへ行こう」と言って泣き続けたほどです（創世記 37:35）。

これは新約にも引用されていますが、エレミヤ 31:15 にこうあります。「主はこう仰せられる、『嘆き悲しみ、いたく泣く声がラマで聞える。ラケルがその子らのために嘆くのである。子らがもはやいないので、彼女はその子らのことで慰められるのを願わない。』」子どもを失うというのは、どんな慰めをも拒むほどの嘆きなのです。

きょうの箇所「役人」も、息子が命を失いかけてようとして

いましたから、同じような嘆きの中にあったことでしょう。もし、彼の息子がひとり息子だとしたら、彼は後継ぎを失うわけで、彼が築いてきた地位や、財産をひきついでくれる者がいなくなるのです。息子の死は、彼にとって「将来」を絶たれることでもあったのです。この人は、息子を失う悲しみとともに、将来に対する絶望をも味わっていたのです。それで、この「役人」は、本気で救いを求め、そのときカナにおられたイエスのもとに駆けつけたのです。

彼は自分のかわりにしもべを遣わして良かったのですが、自分自身でイエスのもとに行きました。ここに父親としての愛情が表われています。聖書はこの人を最初は「役人」と呼びましたが、最後には「父」（53節）と呼んでいます。彼をイエスのもとに向かわせたのは、じつに、子を思う父の愛からでした。

二、喜びを与える奇蹟

カナの町にいるイエスを見つけた父親は、イエスに懇願して言いました。「わたしの息子が死にかけています。今すぐ、わたしといっしょにカペナウムに来て、息子を治してください。」（47節）ところが、イエスは真剣に願う父親に「あなたがたは、しるしと奇跡とを見ない限り、決して信じないだろう」（47節）と言われました。イエスがこう言われたのは、ご自分の回りにいた人々のためでもありました。ガリラヤの人たちはユダヤから戻ってこられたイエスに奇蹟をせがんだからでした。もし、イエスがこの父親と一緒にカペナウムに行かれたなら、人々もイエスのあとにぞろぞろとついていき、この人の家にまで入りこんで、イエスがほんとうに病気を治せるのかどうかと大騒ぎしたことでしょう。イエスはこの父親にも、また、

人々にも、「しるし」や「奇蹟」を見てではなく、奇蹟を行われる神であるイエスご自身を信じる信仰を求められたのです。

「あなたがたは、しるしと奇蹟とを見ない限り、決して信じないだろう。」イエスからこの言葉を聞いても、父親はひるみませんでした。なおもイエスに「主よ、どうぞ、子供が死なないうちにきて下さい」と懇願し続けました。わたしたちは、祈っても、すぐに神から答えが来ないと、もう祈らなくなってしまうことがあります。神がすぐに答えてくださらないのは、神が祈りに聞いてくださらないということではありません。見かけは「拒否」に見えても、実は、神は、それによってわたしたちの祈りをより熱心に、より純粹に、またより忍耐深いものにしようとしておられるのです。祈ってすぐに聞かれないからと、あきらめることなく、熱心に祈り求め続けることを、もっと、学びたいと思います。

イエスはこの父親に、行って息子を癒やすということよりも、もっと大きなことで答えてくださいました。これから何時間かかけて息子のところに行くまでもなく、高熱を出して苦しみ、死の淵にある息子を、その場で、即座に癒やしてくださったのです。イエスが父親に「お帰りなさい。あなたのむすこは助かるのだ」（50節）と言われたとき、息子は癒やされたのです。

「あなたのむすこは助かる」という言葉は、新共同訳では「あなたの息子は生きる」と訳されています。このほうが原語に忠実です。そして、神の言葉が人を生かしているという真理を示しています。イエスは「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」（マタイ4:4）と言われましたが、これは、神の言葉が人を精神的に生かすということだけではなく、世界のありとあらゆるものに

実際に命を与えていることを言っているのです。この世界は、神が「光あれ」（創世記 1:3）と言われて造られました。神は言葉によって世界をつくられたのですが、その中にある命あるもの、植物も動物も、その神の言葉によって生かされているのです。

エゼキエル書 37 章に、枯れた骨に神の言葉を語りかけると、骨に筋肉が生じ、筋肉に肉がつき、皮膚で覆われ、生きたものとなったという幻が書かれています。人は死ぬと、最後に骨が残るのですが、神の言葉は、そのプロセスを逆にもどして、骨から生きた人を生み出す、神の言葉が人に命を与えるということをする。この幻は神の言葉が人を生かすことを描いています。讚美歌に「命のみことば妙にくすし」（新生讚美歌 134）とありますが、まさにその通りです。神の御子が「あなたの息子は生きる」と言わたとき、その言葉が息子を生かしたのです。カナとカペナウムは 15 マイル以上あり、歩いて何時間もかかります。しかし、イエスの言葉は、その距離を越えて働き、この人の息子を生かしたのです。

三、父親の信仰

この人は、イエスの言葉を信じました。イエスは、そこにいた人々に「あなたがたは、しるしと奇跡とを見ない限り、決して信じないだろう」と言われましたが、そう言われてもしかたのない、しるしだけを求めていた人々の只中で、彼は、しるしを見ることなしに、信じました。イエスの言葉を信じて、もときた道を引き返していきました。すると、帰り道の半ばあたりで、彼の家からしもべたちが自分のところに駆けてくるのに出会いました。この人は、一瞬、「息子が亡くなった」と知らせ

にきたのだろうかと思ったかもしれません。しかし、それは、吉報でした。しもべたちは息子が助かったことを知らせに来たのです。父親がしもべたちに息子が治った時刻を聞くと、「きのうの午後一時です」との答えがありました。父親がしもべたちに出会ったのは、夕暮れ時だったと思いますが、ユダヤでは日没から次の日になるので、「きのう」の午後一時という言い方になったのです。そして、それは、ちょうど、イエスが「息子は生きる」と言われた時刻だったのです。父親は、「しるし」を見ないで信じましたが、イエスの言葉が息子を生かしたという「証拠」を与えられました。神の言葉を信じ通す者は、それが真実であることを実際に見ることができるのです。

53節に「彼自身もその家族一同も信じた」とあります。父親ばかりでなく、母親も、息子も、しもべたちも、一家をあけてイエスを信じる者になったのです。きょうの箇所が、「息子は助かりました」で終わらず、「彼自身もその家族一同も信じた」という言葉で終わっているのは素晴らしいことです。これは、カナで行われた二度目の奇蹟ですが、一度目、イエスが水をぶどう酒に変えられた奇蹟の時も、「そして弟子たちはイエスを信じた」（ヨハネ2:11）で終わっていました。

奇蹟によって病気が癒やされるというのは、大きなことです。しかし、その癒やしは、たとえ奇蹟によるものであったとしても永遠に続くことはありません。やがてまた別の病気にかかるかもしれません。健康で生涯を過ごしても、すべての人にはかならず死が訪れます。見えるものには限りがあるのです。いつまでも残るものではないのです。しかし、信仰はいつまでも残ります。信仰とは、神の言葉を真実なものとして受け入れることです。「信じる」という漢字は、「言」に寄り頼む様子を表

わしています。神の言葉に聴き、それに信頼して行動することがなければ、どんな奇蹟を見たり、体験したりしても、それによっては人は生かされることはないのです。

ある人が言いました。「神は人を生かすために、いったん人を死に追いやる」と。これは、とても強い言葉ですが、真実だと思います。実際に死に直面するというだけでなく、物事がどんどん悪い方向に進み、希望が奪われ、暗闇の淵に追いやられるようなことが人生にはあるものです。詩篇にあるように「死の陰の谷」を歩くような時があるのです。しかし、神を信じる者は、神の言葉によって、絶望から希望へ、闇から光へ、死から命へと導かれるのです。アブラハムもサラも、もう子どもを持ってない年齢になってから、約束の子、イサクを与えられました。肉体的にいったん死んで、神の言葉によって再び生かされたのです。アブラハムがイサクを犠牲として捧げたときもそうでした。イサクはいったん死んで、再び生かされたのです。この父親も、いったん子どもを亡くして、再び生かしてもらったのに等しい体験をしたのです。

苦しみは、わたしたちをへりくだらせます。「神に頼らずとも自分の力でやっていける」と考えていたことが間違いであったことに気づかせてくれます。大きな苦しみでなくても、日常の様々な出来事を通して、わたしたちは、自分の心を正直に見つめ、神を真実なお方としてこなかった罪に向き合う必要があります。そうした悔い改めを通して、はじめて信仰は育つのです。罪と古い自分に死ぬことによって、神によって生かされる人生へと向かっていくのです。

バプテスマは古い自分に死に、キリストにある新しい人生に入ることです。「新しいものを得たいが、古いものに死ぬのが

怖い。」パプテスマを躊躇している人から、そんな思いを聞かされたことがあります。そのようなとき、神がご自分の御子を死なせたが、再び生かされたということを思い起こしましょう。十字架に死に、新しい命に復活された主イエスが共におられることを覚えましょう。主と共に死に、主と共に生きるのです。そのとき、「あなたは生きる」という主の言葉が、わたしたちの内に成就するのです。

（祈り）

父なる神さま、目に見えるものに心奪われやすいわたしたちに、御言葉に聞くことを、御言葉を聞いて信じることを教えてください。そして、御言葉によって生かされるという、大きな奇蹟を体験させてください。主イエスのお名前です。